

◆◆◆ 「予報技術者のための講習会 予報実践コース」の 「梅雨前線に伴うメソβスケール現象」の講習行われる

(財) 気象業務支援センターでは、気象の知識や技術の普及や習得活動の一環として、「気象を学習する講習会」と「予報技術者のための講習会」の2種類の講習を本年度開講しています。このうち前者は、気象の知識を基礎から習得するもので、年2回(上半期・下半期)開催されています。上半期のコースは、現在ほぼ最終段階を迎えておりますが、下半期のコースはこの秋から開催される予定です。下半期のコースの内容等は、上半期と同様で、それらの日程や募集要項については、近日中に当センターのホームページに掲載します。

一方、後者の「予報技術者のための講習会」は、主に、予報業務の従事者や今後の従事を目指している方々を対象に実践的な予報技術の習得を目指したもので、「予報実践演習コース」、「数値予報GPV活用予報演習コース」および「新予報技術演習コース」の3種類から構成されて、各コースとも3つのテーマについての演習等が行われます。

このうちの「予報実践演習コース」のなかの「梅雨前線に伴うメソβスケール現象」の講習会が、7月15日(水)および22日(水)のそれぞれ午後2回にわたり当センターにおいて行われました。このコースは、当センターの入田 央氏(元気象庁予報課予報官)が講師を担当しました。演習では、当センターが用意したCD-ROMから衛星画像、GPVデータ、実況データ等を受講者の手元のパソコン(受講者による持込、また、当センターから当日貸与)上にロードし、梅雨前線と周辺環境場の構造の把握、予報対象地域の数値予報資料の検討、ワークシートの整理と気象シナリオの作成等の作業を行いました。この演習により、受講者は、数値予報資料を効果的に利用し、梅雨前線に伴うメソβスケール現象に関する天気翻訳のスキルを向上することができました。

【担当講師のコメント】

気象情報を提供するとき、気象庁の数値予報資料や天気図をニーズに適合した情報に翻訳する必要が生じます。気象予報士資格を取得した方でも天気図を見る機会が少ない方は、天気翻訳に自信がもてなかったりすることがあるのではないのでしょうか。また、経験豊富な方でも、思い込みで天気図を見ていることもあります。今回の講習会では、こうした方々にとっても、大気の鉛直構造を的確にイメージしたうえで、現象を理解するとともに天気翻訳の着眼点等を習得できるような教材を用意して、演習を行いました。

【受講者から寄せられた感想】

- ・気象の変化を監視・予測するうえでの実践的な視点と手順を学ぶことができました。
- ・実際の予報手順の流れと着目点が整理できました。
- ・データをみるのが楽しくなりました。
- ・時期的にタイムリーなテーマであったため、興味深く受講させていただきました。
- ・前日(7月21日)に起こった事例の見方が紹介されていて、理解を深められました。

「予報技術者のための講習会」では、この後、9月から来年2月にかけて以下の6つのテーマについての講習(主に気象庁の予報業務担当者が講師を担当)を予定しており、それぞれの受講募集については、順次、当センターのホームページに掲載します。

- ①「予報実践演習コース」・・・「北偏した高気圧周辺の現象(雨、霧)」(9月)
- ②「数値予報GPV活用予報演習コース」・・・「台風周辺の現象(雨、風、波)」(10月)、
「高気圧の南東暖湿気による現象」(11月)、「前線通過時の現象」(12月)
- ③「新予報技術講習コース」・・・「数値予報」、「量的予報」(ともに、平成22年2月)



(写真は7月15日の講習の一コマ)